



Title	2024年夏・モンゴルの旅：ホブド点描
Author(s)	吉本, るり子
Citation	モンゴル研究. 2024, 33, p. 51-56
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102414">https://doi.org/10.18910/102414</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《雑 感》

## 2024年夏・モンゴルの旅 — ホブド点描 —

吉 本 る り 子

コロナ禍明けの2024年夏、モンゴルを訪れ、ホブド県<sup>アイマク</sup>を旅した。ほぼ40年ぶりだった。

社会主義時代の2年の留学期間、行動範囲はウランバートル(U.B. と略す)から半径何キロ以内と制限され、大学が実施する夏の実習旅行<sup>ブラクテイク</sup>でハルホリン方面を見学した以外は、外国人旅行者向け観光地を除き地方を旅することができなかった。自由に旅行できる今、行きたい場所は数多だったが、体力・気力のあるうちにと、モンゴル西部ホブド方面とした。ウランバートルから地方への飛行機便は発着曜日が限られ、7月28日：U.B. 発～ホブド市着、8月1日：アルタイ市発～U.B. 着の4泊5日、ホブド北部、バヤンウルギー県境の万年雪を頂くツァンバガラヴ山(標高4193m・国家特別保護地区指定)方面からホブド南西部ツェツェッグ・ソムを経て、空港のあるバヤンホンゴル県アルタイ市までジープ(ランドクルーザー)で走破する、旅行社によると総計約1300kmの強行軍となった。

### ◇家畜たちの楽園?! ツァンバガラヴ山麓キャンプ地

7月28日、ホブド市からツァンバガラヴ山を間近に眺める標高約2700mの高原のキャンプ地へ。ここからツァンバガラヴ山のあの雪渓まで、「人が引く馬に揺られて5時間で行けます。行きませんか?」と旅の初めに運転手のビルバーさんに尋ねられて心動いたが、この日程ではどうにも無理だった。

キャンプ地の管理人家族のゲルの近くに我々旅行者のゲル2つ、そして通訳のジャミヤンさんとビルバーさんのテント一張り<sup>1</sup>が設営されているだけ。旅行者向けキャンプ地だが我々の他に旅人はいない。ここらあたりは広々とした高原。牧畜にとっては移牧の夏営地で涼を求めて、下から移動してきた馬の群れ、牛の群れ、山羊の群れがそれぞれゆったりと草を食んでいる。離れてゲルが点在するが、群れ近くに人影はない。



写真1 万年雪を頂くツァンバガラ  
ブ山(標高4193m) 遠景



写真2 ホブドの山並み



写真3 ツァンバガラブ山麓、  
ゆったり草を食む馬たち



写真4 ツァンバガラブ山麓  
の放牧地(標高約2700m)



写真5 仔山羊を待つ母山羊



写真6 母山羊に駆けよる仔  
山羊



写真7 乳を飲み、そして一  
緒に帰って行く

まだ明るい19:00時過ぎ、ゲルの外が何やらメエーメエーと賑やかだ。近くに山羊たちの群れがある。よくよくみると、右の少し高くなっている丘状の牧地から、仔山羊がメエーメエーと叫びながら一頭ずつ駆け下りてくる。メエーメエーはそれだけでなく、下の牧地の親山羊の群れからもまた至る所で聞こえてくる。何事？しばらく眺めていた。搾乳のために、仔山羊たちは母親から引き離され別の群れとなって上の丘の牧地にいたのだが、この時間帯群れを解かれ、母山羊の群れに飛び込んで母親を探し出し、乳を飲むのである。下で待つ母山羊も我が子呼び続け、見つけては乳をやる。毛色がまったく違うのにも思うケースもあるのだが、彼らが間違えるはずはない。この邂逅が毎日繰り返されるのだ。

牛たちは自発的に搾乳にやってくる。そしてそのあと仔牛に飲ませる。これもいつものルーティン？とにかく人影がほとんど見られず、家畜たちがそれぞれ自律的に動いているように思える。群れを外れて、草を食んでいる馬がいる。ふらふらと牛3頭が私たちのゲル近くにやって来た。ジャミヤンさんに教えられ、チョー、チョーと追い払う。家畜と人との緩やかな関係。

翌朝、隣の管理人さん家族のゲルを訪問、スーテイツアイやボールツォクをよばれる。馬に乗りませんか？と聞かれる。娘さんは馬に乗って約20km離れたところのparty(集まり)に行ったという。小学校高学年ぐらいの息子さんに、「将来牧民になるの？」と尋ねると、「思っていない」という返事。さらに聞かけると、恥ずかしそうに逃げていった。

### ◇西域の風が吹く ホブド市の青空市場

少し離れた地点からホブド市を眺めると市街地の少し手前、ボヤント川川辺の緑地帯に点在するゲル群が見える(写真8)。ホブド市には、ボヤント川沿いにゾスラン(夏の別荘)地帯が設けられ、そこには誰でも自由にゲルを建てることができるという。市中心部の住民も夏は緑豊かなボヤント河岸へ移動し、そこから市街地へ出勤する。他の季節、そのゲルはどうするのかと聞くと、物置に保管するという。ツァンバガラブ山のキャンプ地では移牧の畜群を見たが、夏の間、人も涼を求めて移動するのだ。自然と人の暮らしとの自由な関係。古くは大都(北京)を造営したフビライ・ハーンも4つの宮殿<sup>オルド</sup>をもち、10月から2月までは大都、春の3月から秋の9月までは上都に居住し、移動の道すがら、ツァーガン河畔の宮殿等に滞在した。



写真8 ボヤント川辺の緑地帯

キャンプに備えホブド市で、青空市場に買い出しに行った(写真9)。市場には自家用トラックで運ばれてきた野菜類、ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、キュウリ、ネギ、キャベツ、トマトや果物類、特に瓜類が豊富に並ぶ。私たちは西瓜 шийгуа、瓜 амтат гуа、小粒のホブド産リンゴ(これはホブドにしかないリンゴだそう)を購入。他にキュウリとトマトも買い込んで、約6000～8000トグルクだった。豊かな光景。ここでは西域の風が吹く。



写真9 ホブド市の青空市場

### ◇砂利道は 馬を操るがごとく

今回、舗装道路を走るときはラッキーだった。ホブド市からツァンバガラブ山麓キャンプ地に向かうときも、舗装道路は80kmで終わった。2泊目の宿泊地ドウルゲン・ソムから3泊目のツェツェグ・ソムまではかなりの距離だ。運転手のビルバーさんは、交渉し水力発電所のゲートを通してもらった。ここから建設中の舗装道路に入れる。完成すればこの道はホブド市と南を結ぶ近道となる。しかし舗装区間は途切れ途切れ、それ以外はデコボコがあったり、流れる小川を渡ったりとハードなルートだった。熟練運転手のビルバーさんは何本もある轍のあとを、瞬間的に選んで進んだ。モンゴル語の運転手<sup>ジョローチ</sup>という語は、馬の"手綱"を握る人の意だが、ビルバーさんは乗馬の名手だそうで、私はしごく納得した。

### ◇道路 トラブルも知り合いの力で解決!!

ホブド川沿いで休憩後、車が動かなくなった。通訳のジャミヤンさんが電話で誰かに尋ねてはビルバーさんがやってみる。しかし、動かない。ジャミヤンさんが電話して、代車をもってきてもらうことになった。通りがかりの知り合い <sup>タニル</sup> танил が車を止め、やって来た。事情を話すと、車に詳しい彼の同乗者がビルバーさんに復旧方法を伝授、やってみるとエンジンがかかった。一同ホッとする。ジャミヤンさんは代車要請中止を電話で伝えた。その後も休憩で車を止める度に動かなくなったが、ビルバーさんは対処法を習得したようだ。この道は舗装道路で車は走っているが、交通量は非常に少ない。でも誰かが車を止めて助けてくれる。私は40年前の夏の実習旅行 <sup>ブラクテイグ</sup> を思い出した。雨上がりの草原で、ぬかるみにはまって私たちのマイクロバスは動かなくなった。全員で押したり引いたり。周囲には何も無い。運転手さんが遠くのゲルヘスコップを借りに行ったが拉致があかない。みんなここで野営かと、座り込んだ。そこへトラックが一台通りかかった。トラックがトラクターを呼んできてくれた。マイクロバスはぬかるみを難なく脱出し、我々は無事、宿泊予定のソムに着いた。あれは社会主義時代だったからと思っていたが、同じ力が今も働いている。

### ◇豊かな鉱物資源 露天掘りの炭鉱

ツェツェグ・ソムに向かう道中、丘を越えたところで左手の山並みに露天掘りの炭鉱を見た(写真10)。一律の傾斜で山裾が削られていた。中国製のトラックが、2台、3台と連なって満載の石炭を運んでいた。なんでも、国境の二つの関門から中国へ搬出するという。毎日毎日こうして運び出すのだ(写真11・写真12)。

ソム設立100周年行事についてのゾーニーメデー紙のインタビューでソム長は、「炭鉱事業の経済効果でソムの住民の生活水準は上昇してきている。炭鉱関連でソムへ転入する人々は増えており、土地や職の斡旋等の業務を段階的に実施している」と述べている。



写真10 露天掘りの炭鉱



写真11 石炭満載のトラック



写真12 連なって石炭を運び出すトラック、国境関門へ

### ◇牧民運動の聖地、ツェツェグ・ソム訪問

ツェツェグ・ソムへは何としても行きたかった、モンゴル革命(1911年)前後の“アルド・アヨシの牧民運動”の舞台である。いわば牧民運動の聖地だ。同ソムには、アヨシ記念広場がある。1979年に記念パネルが設置され、2019年の生誕160周年に現在のように整備された。

ソムの記念の広場の石碑にはアヨシについて、次のように刻されている。

アルダルジャビイン・アヨーシ

「アルダルジャビイン・アヨーシは1859年、ザサクトハン・アイマクのダルハンベイリン・ホショーのヌツゲンという土地で生まれた。1889年にホショーの民<sup>アルド</sup>ダンバルの娘、ドルマーと結婚、息子ダルハー、ツェベック、娘ショムボンをもうけた。また、養子(男)をひとり育てている。

彼は清の残忍な支配者、皇帝・王侯貴族が、モンゴルの人民を抑圧し搾取していた時代に、人民の先頭にたって抵抗し闘った。

1911年にマニバザル・ホショーの民を先導し闘争したことから、ホショーの領主マニバザルはアヨーシに苛烈な拷問を科し、牢獄に入れた。1911年2月26日、民衆は「アルド・アヨーシ」を救出し、ゴンボジャブ・タイジをはじめとする200人余りが蜂起し、「ツェツェッグ・ノーリン・ドゴイラン」を結成、44カ条の要求を記した訴訟状を提出した。

訴訟状は封建領主の圧政に抗して領主の抑圧を摘発したものであり、165人が、銀碗を囲んで(誰が首謀者かわからないように)円形に署名した。

「アルド・アヨーシ」は闘争を先導し、そのために「9種の拷問」を受け、それに耐え抜いた勇者であった。民衆のために果敢に闘ったアヨーシを、人々は「アルド・アヨーシ(民のアヨーシ)」と呼び賞賛した。

「アルド・アヨーシ」は1929年に開かれたハンタイシルオール<sup>アイマク</sup>県 小会議およびモンゴル人民革命党第8回大会に、代表として選出された。

彼は人民革命が勝利しよき時代を迎えたことを見つつ、1939年、享年80歳で亡くなった。

A. アヨーシの民族解放の闘争、勇気、功績を永久に記念して、同ソムの学校の名称を1959年にアルド・アヨーシ記念学校とし、アヨーシ像を1961年ホブド県の県庁所在地に、さらに、1966年ツェツェグ・ソムの中心地に建立し称えた。」

アヨーシ記念広場の解説パネルによると、広場は拷問を受けた場所に建設され、ドゴイランのメンバーが結集したシャハート шахаат という土地はここから西へ20kmの地点だという。記念広場は広大な平原のど真ん中にあった。私は、歴史家 Sh. ナツアッグドルジの著書(Ш.Нацагдорж. Монголын феодализмын үндсэн замнал (Түүхэн найруулал) :УХГ.,1978.)でアヨーシの牧民運動についての記述を読み、アヨーシが領主マニバザルに抗議して、ツェツェッグ・ノーリン・ドゴイランを結成し、その仲間たちと立てこもったオーリン・アムという土地に行ってみたいと思った。日本の一揆という逃散をイメージしたのだが、現地で見ると立てこもるような狭い空間ではなかった。



写真13 アヨーシ記念広場



写真14 周囲は広大な平原



### ◇ドゴイランと傘<sup>からかさ</sup>連判状

アヨーシ記念広場には、小山の頂上のアヨーシ座像、アヨーシの受けた"9種の拷問"の碑のほかに、狼のモチーフの下部に、訴訟文書の円形の署名を刻んだモニュメントがある。ドゴイラン дугуйлан と言う言葉を辞書でひくと、訴訟文書が皆の合意であり、誰かが首謀者ではないことを示すため訴訟文書に円環状の署名を行ったことから抵抗の主体、牧民運動の集団を、ドゴイラン дугуйлан と呼ぶようになったとある。円環状の署名は日本の一揆でみられる傘連判状と同じ形態だ。最近私はこうしたものが、自分の故郷で、幕末の「生駒一揆」の際に作成されていたことを知った。場所や時代は違えども、心の底にどこか同じ思いがある。



写真15 広場頂上の  
アヨーシ座像



写真16 訴訟文書の円環状の  
署名を刻した  
狼のモニュメント

### ◇モンゴルの未来を担う？ タフで明るい人々

40年ぶりのモンゴルで出会った人々はタフで、明るい人々だった。ドウルゲン・ソムの<sup>ホ・テル</sup>宿泊所の女主人は小学校の先生を勤め、定年退職。50代で年金生活に入り、今は5つの<sup>ホ・テル</sup>宿泊所とパン・菓子製造工場、保育所を経営する。<sup>ホ・テル</sup>宿泊所の板囲い内には、保育所およびパン・菓子製造工場棟があり、自らパン、菓子を焼く。子どもは3人、娘さんの子どもたち、つまり孫が夏休みで来ている。幼児教育はバッチリだ。通訳のジャミヤンさんは、我々をアルタイ空港から見送ると、その足で次の旅行客をチンギス・ハーン空港で出迎えるため、長距離バスでU.B.へと向かった。彼は、中古車販売業も行っている。運転手のビルバーさんは長年技術学校の教師を勤め、さらに自然保護団体のメンバーでもある。ジープのダッシュボードにはホブドに生息するユキヒョウ三匹のぬいぐるみが置かれていた。U.B.で開催された自然保護団体の会合でビルバーさんがもらったものだ。揺れる度に轍のあとを辿るように右へ左へと移動し、和ませてくれた。U.B.でのこと、帰国の当日、空港までタクシーを頼んだ。現われたのは、きれいな自動車をもつ幼児連れの夫婦で、妻がドライバー、夫は助手席に子どもを抱いて乗り込んだ。私達をおろした後、子どもと空港へ遊びに来たかのように楽しんでいた。自由な働き方。かたや内部まで企業・職場に取り込まれ、過労死さえ起きる日本。ホブドで朝食・昼食に立ち寄ったソムの食堂の料理はとても美味しかった。ジャガイモ入り炒めご飯、キャベツサラダ添え。ソムの料理上手のおばさんが、楽しんで作ってくれている、そんな気がした。活力あるモンゴル、その未来は明るい!?

(よしもと るりこ)